



「秋の静物」 加藤明〈14～15歳作〉

## 始めに

### 迷信中の迷信

もしも、路上の犬や猫を、誰かがいきなり蹴り上げたり、棒や何かで叩き始めるのを、目の当たりにしたとしたら、あなたは どう思い、どんな行動をしようか？ 大方の人は、その犬猫を不憫に思い、思うだけに留まらず、乱暴な人から救い出すために、声を上げたり、その暴力を阻止しようと、身を挺するかもしれません。日々善良であろうと心掛けている、愛情深い、大半の人にとって、そのような光景に遭遇することは、不快極まりないことだからであります。

実は、それと同じような不快極まりない光景が、私たちの知らないところで、毎日、数えきれないほど繰り広げられています。店頭に並んでいるパック詰めされた様々な種類の

肉は、その結果に他なりません。暴力を受けない家畜は、一羽も、一匹も、一頭も、いないのです。どう飼育されたにせよ、結局のところ、「殺害」という極め付けの暴力を受けるのですから。しかしながら、善良で愛情深いはずの大半の人が、この暴力には何の声も上げず、行動も起こさず、むしろ喜んで、その肉を口に入れているのが現状です。

「犬や猫はペットだが、鶏や豚や牛や羊は食材だ」という大勢の人々の固定観念が、こうした状況を生み出しているわけですが、犬や猫でさえ、韓国や中国やベトナムなどに行けば、未だに食材視されています。ですから、愛玩動物と食材動物の分類も、何か絶対的な原理に基づいて、始めから決まっているわけではありません。たまたま現在、大多数の国々では、「犬や猫はペットだが、鶏や豚や牛や羊は食材だ」と信じられている、というに過ぎません。

そもそも、「人は健康のために肉・魚・卵・乳製品などの動物食品を食べなければならない」という社会通念にしても、確実な宇宙法則のようなものではなくて、人類が代々受け継いできた迷信に過ぎないのであります。様々な迷信がありますが、これほど大きく有害な迷信はありません。大多数の人は、この迷信に囚とらわれて、よく考えもせず、知らないままに、

動物虐待に加担しています。その結果、本来善良で愛情深いはずの、自分の本性と尊厳を自ら貶め、自己内在の霊力の発露を妨げ、心身を損ない、個人的にも世界的にも、種々の病氣と災禍を招来しているのであります。私は、一人でも多くの人が、この長らく続いていた動物食の呪縛と因習から解き放たれ、神の子・愛の子としての自己の神聖な本分に目覚め、動物食の撤廃によって開かれる、個人的・社会的な無限の可能性に目覚めてほしいと願い、本書を上梓することに致しました。

動物たちは、種の違いや大きさの違いにかかわりなく、一樣に、人から愛されたい、理解されたい、と願っています。私たちに近い哺乳動物ともなれば、その感受性は、人間同様に、或いはそれ以上に、きわめて繊細で、相手の思いを洞察する能力も非常に高くなります。私たちが、動物食は全く不要であることを知り、植物食を実行するだけで、こうした純粹無垢で高貴な動物たちとの間に、えも言われぬ喜びに満ちた、驚異的な交流の道が開けます。その時私たちは、彼らの苦しみを消滅し、彼らの進化成長に寄与することができますばかりか、私たち自身の霊性を高め、地球を真に平和な楽園とすることができるのであります。私たちの兄弟姉妹である、生きとし生けるものとの親密な交流と平和共存は、決して夢物語ではないのです。

## 本書で紹介する八人の植物食者

神仏と言ってもよい、より高い意識によって啓発された人々は、皆一様に、「アヒムサー（不殺生・非暴力）の遵守こそが、個人の真我（神我）実現と世界平和実現の基である」と、教えているのでありますが、本書では、そうした神智・仏智に基づいて、殺生と動物食を避け、植物食を心掛けた人々の中から、世界に際立って大きな影響を与えたと思われる人物、また私自身も特別に敬愛し親近感を感じてきた人物、レオナルド・ダ・ヴィンチ、トルストイ、アンナ・キングスフォード、エドワード・メイトランド、シュヴァイツァー夫妻、宮沢賢治、を紹介することに致しました（第一章〜第五章）。また第六章では、無名の一人物の、非常に示唆に富む、新生体験についても紹介しています。

第七章では、「最優先すべき食事改善」という題のもとに、古今東西の植物食者たち、植物食を薦める神典類やイエス本来の教え、スピリチュアリズムと植物食推進運動の相关性、動物食が人体や可視不可視の環境に及ぼす弊害、不殺生戒遵守の功德、などについて言及致しました。「個人的にも世界的にも、あらゆる問題解決において最優先すべきは、食事改善（植物食への転換）である」ことに、一人でも多くの方々が気づいて下さることを、

心から願っております。

なお、「始めに」「第一章」～「第七章」「終わりに」の冒頭には、私自身が描いた絵を、描画年齢順に掲載しています。カバーにも、22歳作「洋梨の樹」(表)と、30歳作「命の光源」(裏)を載せて頂きました。

※本書全編にわたって、重要と思われる、語句・人物名・地名・著作名・組織名などは、太字にしています。「…(要約)」とあるものは、内容を筆者が要約したものであることを示しています。引用文についても、読み易くするためにルビを追加したり、改行を省略したりしています。また、一般に「ヴェジタリアン」と言う場合、「菜食者」と訳されてはいても、厳密には、植物が主であるが乳製品や卵も摂取する「乳卵摂取菜食者(ラクト・オヴォ・ヴェジタリアン)」を指すのが一般的です。時には、「ベスコ・ヴェジタリアン」と言って、魚を食べる人までも、菜食者の範疇はんちゆうに含められる場合があります。そこで本書では、植物性食品が主であるが余り厳格でない場合は、従来どおり「菜食」「菜食者(ヴェジタリアン)」と表記し、一切の動物性食品を含まない純粋な植物食の場合は、野菜だけではなく穀物や果物や木の実なども含むことを念頭に置いて、「植物食」「植物食者(ヴィーガン)」と表記しています。尚、筆者が「動物」と言う場合、昆虫も含む「すべての動く生き物」を指し、「肉」と表現する場合は、獣肉だけではなく魚介類や昆虫類も含んでいます。